HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	"Maria Concepcion"における対立と統合 : 構造主義と分析心理学の視点から
Author(s)	関本, 正子
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 7, 1-10
Issue Date	2011-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46932
Type	departmental bulletin paper
File Information	Sau7_001.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究論文】

“Maria Concepcion”における対立と統合

―構造主義と分析心理学の視点から―

関本　正子
国際広報メディア専攻　博士後期課程
ms@imc.hokudai.ac.jp

1. はじめに

早くに母を亡くしテキサスで父子家庭に育ち、そこから逃れるために 17 歳で結婚、離婚を経て作家になった Katherine Anne Porter は、置かれた境遇から抜け出すために戦い続けた人である（木村，1974）。Porter のように向上心あふれる女性にとって当時普通とされていた女性の生活が居心地の良いものではなかったことは想像にかたくない。Porter の内面では、突発的にわきあがる「男性的な衝動」と、社会的に要請される「女性的な役割」が常にせめぎあっており、そういった葛藤が Porter を、実家から、テキサスから、今いる場所から駆り立て、次の新天地へと向かわせたのであろう。孤独や貧しさを恐れず自由を追求し続けた Porter の生き方は、自らの人生を前向きに変えて行こうと願う今日の女性にとっても、充分に共感できるものである。

多くの場合、人は目的を持って旅に出る。しかし、旅行とは異なり放浪は行き先より今いる場所からの逃避が理由となることが多い。放浪とは現実の生活からの脱出であり、社会的な義務や束縛を捨て物や場所や構築された人間関係を絶え間なく無に帰す作業でもある。Porter は、その生涯の前半において、社会的な自己に囚われそうになると移動し、自由への渇望が静まると落ち着くというサイクルを繰り返した。いわば、自身の分裂する内面に絶えず揺さぶられ続けた人であるといえよう。

Porter の内面に存在する対立する二項は、無意識、あるいは意識されていたかにかかわらず、彼女の心の中でどのように解釈、処理されていたのであろう。その過程は、Porter の処女作”Maria Concepcion”に、構造主義と分析心理学の両方を用いることによって垣間みることができる。

構造主義とは、研究対象が内包する構造や規則性をブリコラージュや対立する二項という観点から明らかにするための理論である。クロード・レヴィ=ストロースは、人間社会に潜む交換のパターンを探り分析するための方法論として構造主義を生みだし、構造主義の分析対象は言語から神話まで多岐にわたっている。

一方、分析心理学とはカール・グスタフ・ユングによって創始された深層心理学の中のひとつの分野である。フロイドが「過去」、ロジャーズが「現在」を強調したのに対し、ユングは「過程」という観点で人間を捉えており、ユングの思想の中でも「個性化」という概念はユングが人間の心理に見た可能性を顕著にあらわすものである。ユングは、人間の心を膠着した恒常的ものではなく、「個性化」という自己実現への道程であると提唱し、人間の心的発展を積極的に肯定した。

レヴィ＝ストロースは、ソシュールが音と意味の連合における恣意性を見出したことと比較し、ユングが説くところの神話的テーマと結び付く意味、すなわち元型について「構造人類学」において言及している[1]。研究対象の中に存在する対立する

二項を探ること、一見すると無関係なものの結びつきに注目することがレヴィ=ストロースの研究であり、構造主義と分析心理学があながち無関係な学問ではないことがうかがえる。

キリスト教文化の中で生まれ育った Porter が、メキシコ先住民の村で起こったある事件から受けた印象を彼女自身の内面における対立と絡めて書き上げた短編が”Maria Concepcion”であり（浅井，1987）、”Maria Concepcion”には、Porter 自身の葛藤が反映されている。そこには様々な対立と苦悩、そして統合への過程が描かれている。

破壊と創造、分裂と統合を繰り返すことが個性化であるとするならば、まず前提としてその素材となる破片、あるいは統合される前の対立する二項が必要である。素材なくして創造は生まれず、対立なくして統合は起こり得ないという前提のもと、構造主義と分析心理学を用いて、夫の家出や子どもの死など人生の危機に直面した Maria Concepcion が自らの生き方を模索し個性化を行なう過程を、Porter 自身の内面におおける価値観と絡めながら追っていきたい。

2. “Maria Concepcion”にみられる種々の対立　－コード

“Maria Concepcion”には、Maria Concepcion と Maria Rosa というふたりの女性において種々の二項対立が表象されている。夫の浮気や家出、生まれたばかりの我が子の死などに際しても感情を外に出さず冷静にふるまう Maria Concepcion は自制心の強いタイプであり、どちらかといえば男性的な人物として描かれている。それに対し、Maria Rosa は気分屋で感情を素直に面に出すタイプであり、一般に女性らしいとされている言動が多い。

社会的には Maria Concepcion は、村人の多くが興味を示さない教会での結婚という形態をあえて選んだ、神の名のもとに承認された Juan の正式な妻である。一方、Maria Rosa の立場は Juan の愛情だけが頼りの不安定なものではあるものの、そこからは愛情のみをよりどころとする原始的な男女のペアの形態を読み取ることができる。

技術的なコードとして各々の生業をみてみると、Maria Concepcion の生計は食用鶏の売却で成り立っている。Maria Rosa は養蜂が仕事であり、鶏と蜂を比較してみると、蜂は自由にどこへでも飛んでいくことができるのに対し、鶏は飛べない鳥であることに気づかされる。花から花へと飛びまわる蜜蜂と、地面から離れることのできない鶏の違いは明らかであり、愛する男の参戦にも気軽についていく Maria Rosa と、偏屈で頑固な Maria Concepcion を前にして、男性である Juan は Maria Rosa を選び Maria Concepcion のもとから一旦は去っていく。

また、Maria Concepcion は子を亡くし、Maria Rosa は無事に子を生むという点も、対照的である。

表 1　Maria Concepcion と Maria Rosa が示すコードの比較

	性格	社会的	技術・経済的	生物学的
Maria Concepcion	形式重視	妻	鶏	子を亡くす
Maria Rosa	感情中心	愛人	蜜蜂	子を得る

こういった対比について、構造主義の神話学をモデルに分類してみたものが表 1 である。

しかし、Maria Concepcion と Maria Rosa を比較してみて、対照的とはいえない部分もある。ふたりはともに”Maria”という名前であり、キリスト教で”Maria”といえば聖母マリアをイメージさせる。そこには完全なる女性、神の母、無原罪などのメタファーが暗示されている。また、”Concepcion”という単語には、「概念」という意味の他に「妊娠・受胎」という意味もあり、Mari Rosa と Maria Concepcion の人物像から「Rosa（バラ）」と「Concepcion（概念）」は対立項ととらえることができるが、「バラ」と「妊娠」、「バラ」と「受胎」からは相反するメタファーは読み取りにくい。

そこで、構造主義だけでなく分析心理学の個性化という概念をも用いて”Maria Concepcion”を解釈してみたい。”Maria Concepcion”を、ひとりの男性をめぐる対照的な 2 人の女性の話としてだけではなく、「概念」的であった女性が、妊娠、夫の出奔、死産という出来事を経て新しい人生を模索する物語としてもとらえてみたい。

3. Maria Concepcion における死と再生のドラマ　ー個性化

「対立する女性像の統合」というテーマは女性作家の描く物語に時折みられるテーマであり、”Maria Concepcion”に固有のものではない。偏った性向の女性が対照的な同性の「死」を契機に調和的人格を目指して歩きだす同種の物語には、「ジェーン・エア」や「風と共に去りぬ」などがある。これらの物語はいずれも「自律的すぎたり」「勝気すぎたり」する女性たちが主人公であり、それぞれ己の半身ともいえる女性の死に直面し新しい人生を歩き始める。ジェーンはロチェスターの野獣のような妻、バーサの死によって「自律的」であることの他に「衝動性」も大事であることを知り、スカーレットは慈愛の化身のようなメラニーの死に臨んで「主張」だけでなく「従容」も時には必要であることに気付き、自身の意思で人生の新たな一歩を踏み出す。

「ジェーン・エア」のジェーンを自律的としたのは成人後についてであるが、ジェーンは子ども時代にも象徴的な死と人格的統合を経験している。幼少時のジェーンは反抗的で自律的とは言い難い子どもであったが、聖女のような心を持つヘレン・バーンズの死を機に、与えられた環境を受け入れ勉学にいそしむ勤勉な生徒となりローウッド校で成人する。

このように、女性作家の描く女性の個性化を描いた小説には対照的な女性の死をきっかけにして、相手の人格的特性を取り込むというパターンがみられる。

「死」は必ずしも完全な無や終末を意味するわけではない。グリム童話として有名な「白雪姫」も「死と再生」のテーマを持つ民話である。白雪姫は義母の使いの手によって死んだと思われたが、実は森の中で小人たちと暮らしていた。白雪姫は、義母自身から手渡された毒りんごによって再度死ぬことになるが、生き返り他国の王子と結ばれ結婚生活へと旅立っていく。

これら二度の死は、白雪姫に「七人の小人たちとの森での生活」と「別な城での王子との結婚生活」という環境の変化をもたらす。物語は、生まれ育った城での義母との生活より、ふたつの死によってもたらされた新しい生活のほうが白雪姫に幸福をもたらしたことを示唆している。このように「死」は新たな人生へと人を導く

力を秘めている。しかし、「死」を賭けて挑まなければならない人生の転換期には、強い決意と強敵に立ち向かう勇気が必要とされることも事実である。

子どもの死を契機に Maria Concepcion は内なる分身である Maria Rosa と相対する決意を固める様子が克明に描写されている場面が、以下である。

> Maria Concepcion は紐をいじって、もつれさせてしまった。そして、慣れた道を行く代わりに、耕した畑を横切り始めた。彼女は頭の中にある常軌を逸した恐怖にかられて、足をもつれさせ、時々立ち止まっては自分の位置を確かめ王と辺りを見回し、また２，３歩踏み出したりして、やがて彼女は自分が市場のほうへ向かっていないことを悟った。
>
> 途端に彼女は完全に意識を取り戻し、ひどく彼女を悩ませていたものに、彼女が本当に求めているものに気付いた。Maria Concepcion は棘のある茂みの陰に静かに腰をおろして、長い間むしばんでいた悲しみに身をまかせた。
>
> ･･･。
>
> 長い時間が経ってから、彼女は立ち上がってスカーフを顔から払いのけて、再び歩き始めた。[2]

Maria Concepcion の精神の「もつれ」は、Maria Concepcion に「慣れた道」である全きキリスト教徒としての道を踏み外させる。それまで Maria Concepcion が固執してきた価値観は揺らぎはじめ、もつれの原因がわかった時 Maria Concepcion はやにわにスカーフを顔から取り去り歩き始める。

この「スカーフ」は、分析心理学を用いて解釈するとすればMaria Concepcionが周囲の人々に対して見せていた自己像「ペルソナ」[3]であると考えられる。Maria Concepcionのペルソナは、見せかけの態度としてのキリスト教徒、記号としてしか意味のない妻という立場であり、そういった仮面をはぎ取ったことはMaria Concepcionの変容の瞬間、個性化の過程における分岐点を示しているといえよう。

ペルソナを脱ぎ捨てたMaria Concepcionは「(通いなれた) 市場」ではなくMaria Rosaのもとへ赴きMaria Rosaを殺害する。しかし、ここまで読み進めてきてMaria ConcepcionとMaria Rosaは、(Maria Rosaが生きている間は) 一度も対面していないことに気付かされる。ふたりの道は一度として交わってはおらず殺害場面の描写も省略されており、Maria ConcepcionとMaria Rosaの対決はMaria Concepcionが「今まで受け入れることができなかった自分自身[4]」と向き合う内的な行為として隠されたまま進行する。

Porter は、「死と復活」のモチーフを用いて Maria Concepcion の個性化の過程を描いて見せたが、“Maria Concepcion”のテーマは女性の自己実現だけでない。サブテーマとして、西洋的なものと東洋的なものの調和が試みられている点にも注目してみたい。

4. 異なる原理を背景とするふたつの社会　－父性原理・母性原理

分析心理学と構造主義の各観点から”Maria Concepcion”において対立する様々な二項、およびそれらが統合される過程をみてきた。その結果、各々の項を全体的に捉えると、”Maria Concepcion”が社会的な原理の対立をも表象していることに気づかされる。

日本における分析心理学の第一人者である河合隼雄は、「父性原理」「母性原理」という概念を用いて社会や宗教を論じた[5]。河合によると「父性原理」は切断する機能にその特性を示し、すべてのものを切断・分断し、類別するという特徴を持つ。比して「母性原理」は抱合する機能を持ち、絶対的な平等、情動性、慈しみ育てることを本質とする。父性原理には、能力や個性に応じて選別することによってより強いものをつくりあげていく建設的な面と、切断の力が強すぎて破壊にいたらしめる面がある。母性原理には、母子一体という根本原理に基づく子にしがみついて死に至らしめる否定的な面と、分け隔てなく生み育てるという保護の側面がある。

こういった認識に基づくと、神を信じる者、神と契約した者のみを救い、絶対的な強い父の教えを守ることを原則とする宗教であるキリスト教は、父性的な宗教だということができよう。また、”Maria Concepcion”の舞台であるメキシコ先住民の村は、善悪の判断を超えて救済の手が差し伸べられる母性原理の社会であるといえる。

こういった背景を踏まえたうえで”Maria Concepcion”を読んでいくと、メキシコ・インディアンの娘であるにもかかわらず、Maria Concepcion が父性原理に生きる村の異端児として描かれていることがわかる。

> ほぼ一年前に、Maria Concepcionは許可証のために金を払ったが、その許可証というのは印紙を貼った紙で人々に教会での結婚を許す効力を持つものであった。Maria Concepcionは前もって司祭に金を渡しておき、聖週間の次の月曜日にJuanと祭壇の前に歩み出た。日曜日ごとに三週間、Juan de Dios VillegasとMaria Concepcionの結婚予告が司祭によって告げられるのを聞きに行くことは、村人たちにとってもの珍しい経験であった。ふたりは教会の陰で一般に行なわれている、より安上がりで、しかも儀式と同じくらい拘束力のあるやり方でやる代わりに、実際に教会で結婚したのであった。[6]

金のかかる教会で式をあげることはせず、既成事実として男女が一緒に暮らしていくのが一般的な村で、Maria Concepcion はあえて許可証を得て正式な手続きをふむ。”Maria Concepcion” には、熱心に教会に通い神の教えを守るクリスチャンであると同時に、模範的な妻・主婦である Maria Concepcion が至るところに描写されている。Maria Concepcion は、正しい行動を選別、実行することにより、自身が他の村人とは異なるグループ、正当なクリスチャンとして分類されるよう差別化をはかっている。

> Maria Concepcionは、フクロウの骨の焦がしたものやウサギの毛の焼いたの、ネコの内臓など、Lupeが村の病人に売っているドロドロしたものや膏薬などは信じてはいなかった。彼女は、敬虔なクリスチャンであり、頭痛や腹痛には混ぜものをしない煎じ薬を飲むか、毎日のように出かけて行く町の市場近くの薬局で、読めもしない指示が印刷されている瓶入りの薬を買うのであった。[7]

Maria Concepcion は、まじないのように感情面へ働きかけるものではなく、わけがわからなくても権威のほうを重視する人間である。しかし、Maria Concepcion

がキリスト教徒に徹し切れていないことが示唆されている記述もある。夫が家出し子どもを亡くした後、Lupe が自分に同情して祈ってくれていると聞いた Maria Concepcion は、Lupe のところへ出かけて行き言う。

> 「自分のために祈りな、Lupe。それとも、祈りを必要としている誰かさんのため祈ってやるんだね。あたしはこの世で欲しいものは、自分で神さまにお願いするから。」[8]

キリスト教は、神から与えられたものはたとえ苦難であっても甘受するという姿勢を前提とする宗教である。Maria Concepcion の「自分の欲するものを与えてくれるよう神に頼む」という姿勢は、最後の審判を待たずに現世での幸福を神頼みする非キリスト教的な姿勢である。父性原理の神にいくら祈っても求めるものを得られなかった Maria Concepcion は、自ら秩序を回復すべく行動を起こし、夫を取り戻し子どもを手に入れる。

一方、Maria Rosa は原始的で自然な女性像として表現されている。Maria Rosa は、既婚男性の愛人になることも躊躇しない、愛人について戦場へ行くことも厭わない、心の赴くままに生きる素直な女性である。喜怒哀楽が激しく、Juan に

> 「Maria Rosaは静かになんかしてねえ。あいつは、喋るんでさあ。うるさ過ぎる時には、俺はあいつをひっぱたいて『静かにしろ、バカ！』って言ってやります。するとあれは泣くんでさあ。」[9]

と評される Maria Rosa は、いささか女性蔑視の感はあるものの一般的な女性像を象徴しているといえよう。

Maria Concepcion の Maria Rosa 殺しは、相手を打ち負かし滅ぼすための所作であったというよりは、Maria Rosa に象徴される母性原理を Maria Concepcion が完全に自分のものにしてしまうための行為であったと考えるほうが自然である。こういった「相手を呑み込む」「自己と同一化」するという現象は母性原理の持つ特徴であり、Maria Concepcion が Maria Rosa の子を我が子として育てようとするのも、どの子も平等に慈しむという母性原理にのっとった行動である。もし Maria Concepcion が父性原理の立場に固執していたら、Maria Rosa の子は殺されていたはずである。

メキシコの地に連綿と受け継がれてきた土着の考え方である母性原理に、キリスト教では決して得られなかった類の救いを Maria Concepcion が再発見したところで、物語は終わりをむかえる。

“Maria Concepcion”の元となったメキシコ先住民の村での出来事は、Porter にとって母性的原理との初めての出会いであると同時に、母性原理が父性原理をのみこみ統合するという印象的な体験であったのかもしれない。”Maria Concepcion”のラストシーンに広がる安寧と平安に満ちた雰囲気から、自らの内の男性的なものと女性的なものに葛藤していた Porter が、母性原理が父性原理を抱合していく過程に一種の理想像をみていたと解釈することができる。

5. 原理の異なる 3 編の小説　ーアメリカ・メキシコ・日本

Porterの代表作のひとつである”Noon Wine”は、”Maria Concepcion”とは対称的に父性原理による裁きをテーマとした作品である。”Maria Concepcion”が母性原理の勝利のうちに幸福感の漂うなか終わりをむかえるのに対し、“Noon Wine”には父性原理によって押しつぶされるふたりの男が描かれている。主人公であるThompsonは自分の農場の作男をつかまえに来た賞金稼ぎを殺してしまい、父性原理が支配する社会により罪を償うよう強制される。「だが、わしらは人殺しを許すわけにはいかねえ、聖書も言っとるでなあ[10]」という隣人の一言に、父性原理の宗教であるキリスト教の「切り捨てる」機能が端的に表わされている。正当防衛ということで法的には無罪を勝ち取りながらも、Thompsonは周囲からの無言の非難にさいなまれて自殺する。

河合は、キリスト教圏の人々は個人を主張するために父なる神との結びつきを必要としていることを指摘し、キリスト教の神は規範に従わない者に対しては救済の責を持たないと述べたが[11]、この主張は母性原理の支配する国に生まれ育った河合がスイスにあるユング研究所で西洋社会を体験して持つにいたったものであると考えられる。

Porterは、メキシコを舞台にした”Maria Concepcion”とアメリカの田舎を描いた”Noon Wine”という2編を通じて、よりどころとする社会原理の違いを描きわけてみせた。これら2編に、さらに日本の作家の手になる小説「おはん」[12]を加え、原理の違いによるストーリー展開を比較したものが表2である。

「愛人と暮らした7年間に区切りをつけ妻とよりを戻そうとしたちょうどその時に息子が溺死し、男は再び愛人のもとに戻ってしまう」というのが「おはん」の大筋である。表2を見ると「おはん」では誰も裁きを実行もしなければ、裁きが行なわれることを主張する人間もいないことがわかる。妻でさえ愛人を非難せず、我が子を亡くした後、再び愛人のもとへと去っていく夫を責めもしない。全てを受け入れ全てを許す、母性原理に満ちた物語が「おはん」である。

一方、“Maria Concepcion”ではMaria Rosa を殺害したMaria Concepcionを女

表2　原理の違いによるストーリー展開の比較

	“Noon Wine”	“Maria Concepcion”	「おはん」
社会原理	父性原理	父性原理と母性原理の混在	母性原理
裁き	法と宗教と人の3者が人を裁く。	Maria Concepcionが Maria Rosaを裁き、村人たちは Maria Concepcionを許す。	裁きはなく、全ては受容される。
社会規範	社会規範は、法と宗教と人の3者によって主張される。	社会規範は村人たちによって積極的に無視される。	社会規範は存在するが、誰も主張しない。
結末	作男は殺され、Thompsonは自殺する。	愛人は死に、夫が妻のもとへもどる。	男は再び愛人のところへ戻っていき、妻を放置する。

性の連帯という名のもとに村人たちは許し、憲兵から守る。私怨による裁きはキリスト教的ではないものの、挑み、戦い、打ち勝つという姿勢は非常に男性的であり、父性原理を感じさせる。コミュニティの連帯や感情面での共感が社会規範より優先されるという展開は母性原理に基づく価値観であり、“Maria Concepcion”には父性原理と母性原理が混在している様子がうかがえる。

こうして比較してみると、あらためて”Noon Wine”の世界の厳しさが実感できる。「父性原理のもとでは、社会規範を犯した者は誰も生き残れない」というのが、Porter から見た父性原理の支配する社会であり、Porter が生れ育った保守的なアメリカの田舎町の実情と、そういった環境を Porter がどのように感じていたかが察せられる（笹谷，1975）。

母性原理礼賛を暗示する物語ではあるものの、“Maria Concepcion”の結末は「おはん」と比較すると際立って大団円的である。”Noon Wine”は無慈悲な終わり方をし、“Maria Concepcion”にはハッピー・エンドが描かれており、「おはん」には結末らしい結末がない。これらの終わり方の違いは、原理の違いに起因するものであろう。

6. Porter から観た 2 つの社会　ー熱い社会・冷たい社会

前章における 3 作品の比較から、アメリカの田舎町に白人として生まれ育った Porter が父性原理の思考から完全に逃れることはできなかったことが示唆された。再び構造主義に立ちかえるとするならば、人間は必ず何らかのシステムに属しており、所属システムの思考パターンに囚われざるをえないと考えられる。Porter もメキシコ先住民の文化や母性原理に基づく考え方を強く肯定しながらも、結局のところアメリカの白人文化から完全には脱却できなかったのであろう。「人はシステムの中で、意識できない回路が存在することを意識できない」という構造主義が提唱するパラドックスに従うとするならば、Porter は自身を支配している強固な父性原理に気付いてさえいなかったのかもしれない。

しかし、ひとつ言えることに、Porter がメキシコ・インディアンの村社会の価値観を決して見下してはいなかったことが指摘できよう。Porter は、レヴィ=ストロースが提唱したところの「熱い社会」「冷たい社会」の「冷たい社会」に類似した捉え方でアメリカ社会とメキシコ社会を解釈していたと思われる。

「熱い社会」とは「歴史的生成を自己の内に取り込んでそれを発展の原動力とする[13]」社会であり、帝国主義的な価値観が支配する社会を評したものとされている。過去の上に積み上げてきたものを利用して飽くなき向上と拡大を続ける文化が「熱い社会」である。一方、「冷たい社会」とは「自ら創り出した制度によって、歴史的要因が社会の安定と連続性に及ぼす影響をほとんど自動的に消去しようとする[14]」社会であるとされており、レヴィ=ストロースはふたつの社会のあり方を優劣ではなく単なる差異であると定義づけている。

Porter はメキシコ・インディアンの村という異文化との接触により、「熱い社会・冷たい社会」に類似した概念に気付くことができた。一見すると、Porter の人生は、常に変化を求める「熱い社会」的な生き方に見える。しかし、「熱い社会」の持つ「時間的な流れの中で蓄積してきたものを糧に自らのフィールドを広げていく」という特性は、Porter の人生にはみられない。むしろ、積み上げてきたものを出奔によって抹消し続ける姿勢、そこから生じる不安定さによって常に所属システムを客観的

に見ようとする視点こそが、Porter の真骨頂であるといえよう。

システムから完全に逃れることはできないにしろ、常にできるだけシステムを外側から見ようとする姿勢は、小説家に特有の傾向である。小説家は、自身の描く世界の造物主であり、いわば芸術作品というひとつの完結したシステムの外の存在である。しかし、小説家自身もシステムから逃れることはできず、小説家も読者も所属システムの価値観からは逃れることはできないことも、また事実であるといえよう。

7. おわりに

構造主義と分析心理学を用いて、①二項対立するシンボル、②女性性の対立と統合のプロセス、③社会原理の差異、④所属システムからの脱却志向という三つの観点から”Maria Concepcion”をみてきた。

ノイマンは「女性は、男性的なものも発達させないわけにはいかない[15]」と述べているが、社会の発展に伴い女性の中における男性性は飛躍的に発達したといえよう。しかし、それに反比例して有史以来人間の有してきた「許し、受け容れる」という心的機能が低下したことも事実であり、”Maria Concepcion”はそういった社会の変化に対する警告とも解釈できる。

Porter は、Maria Concepcion の持つエネルギーと、Maria Rosa 的な感受性の両方を評価し、それらを”Maria Concepcion”において調和させようと試みた。Porter 自身は、生涯分裂したままの自己を保ち続けた人であると考えられるが、こういったアンバランスさは作家にとっては芸術的才能の源となりうるものの、市井に暮らす人々にとっては穏やかな日常生活を継続していく妨げとなりやすい。特に女性にとっては安定した家庭生活を脅かす要因となり、Maria Concepcion 風の態度を前面に押し出せば社会から敬遠され、Maria Rosa 風の生き方を選べば世間から非難される。

“Maria Concepcion”は Porter の処女作であり、ごく若いうちに書かれた作品であり、執筆時点では自身がその後どのような人生を送ることになるのか本人にも予測はできなかったはずであある。物理的にはあてなき移動を繰り返しながら、精神的には大地に根をおろす太母のように生きることを夢見ていた女性が、Porter であったのかもしれない。

人は様々に分化したものを統合することによって幸福を追求し続ける生き物である。しかし、統合は「完成／未完」のように単純に二分できるものではない。多くの人間は、自己実現への道程を何度も繰り返しつつ、自らの人格的完成における「完全な充足感」を一度も経験しないまま死を迎える。

人間という種が続く限り、内的にも外的にも人はあらゆる意味において対立を繰り返し、また飽くことなく「和」に憧れる。だからこそ、”Maria Concepcion”は国や文化や原理を超えて人の心を打つのだといえよう。

テキスト

Katherine Anne Porter（1979）*The Collected Stories of Katherine Anne Porter*, New York : Harcourt Brace & Company.

引用文献

浅井 明美（1987）Katherine Anne Porter とメキシコ　―インディアンの女性像をめぐって―，活水論文集，30，pp.43-54.
木村 淳子（1974）逃避への情熱，北海道武蔵女子短期大学紀要，26，pp.11-22.
笹谷 卓（1975）Katherine Anne Porter の教会批判　―文学作品を中心として―，創価大学文学部文学部論集，4(2)，pp.1-9.

参考文献

シャーロット・ブロンテ，大久保 康雄（1985）ジェーン・エア，上･下，新潮社.
ジークムント・フロイト，懸田 克躬（1992）精神分析学入門，中央公論新社.
ビセンテ・ゴンザレス（1986）西和辞典，エンデルレ書店.
マーガレット・ミッチェル，大久保 康雄・竹内 道之助（1977）風と共に去りぬ，1～5，新潮社.
尾上 政次・野崎 孝（1982）キャサリン･アン･ポーター　花ひらくユダの木・昼酒，英宝社.
E. H. ロペズ，小林田鶴子（1984）キャサリン･アン･ポーター、自己を語る　－虚像と実像の間－，大阪教育図書.
上野 直蔵・太田 藤一郎（1987）対訳アン･ポーター，南雲堂.

注

[1] クロード･レヴィ＝ストロース，荒川 幾男･幾松ほか（2007）構造人類学，pp.230-231.
[2] Katherine Anne Porter (1979) *The Collected Stories of Katherine Anne Porter*, New York : Harcourt Brace & Company, pp.13-14.
[3] 「ペルソナ」とは、人が社会に対して見せている顔のことであり、自分を守るためにつけている殻のようなものである。cf. 秋山さと子（1982）ユングの心理学，講談社，pp.154-160.
[4] 分析心理学の「シャドウ」という概念を参考にしている。cf. 河合隼雄（1993）ユング心理学入門，培風館，pp.101-102.
[5] 河合隼雄（1982）母性社会日本の病理，中央公論社，pp.8-20.
[6] Ibid.，pp.4.
[7] Ibid.，pp.4.
[8] Ibid.，pp.9.
[9] Ibid.，pp.12.
[10] Ibid.，pp.264.
[11] 河合隼雄（1994）河合隼雄著作集 第 14 巻 流動する家族関係，岩波書店，pp.21.
[12] 宇野千代（1966）日本現代文學全集 71　宇野千代集，講談社.
[13] クロード･レヴィ=ストロース（2005）野生の思考，みすず書房，pp.280-281.
[14] クロード･レヴィ=ストロース（2005）野生の思考，みすず書房，pp.280-281.
[15] エーリッヒ･ノイマン（1980）女性の深層，紀伊国屋書店，pp.36.